

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 13 日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720168

研究課題名（和文） Root Emedded Clause 現象の統語メカニズムの研究

研究課題名（英文） The Syntax of Root Embedded Clauses

研究代表者

平岩 健 (HIRAIWA KEN)

明治学院大学・文学部・准教授

研究者番号：10572737

研究成果の概要（和文）：

本研究課題では、「主節・根節として生起する従属節」としての REC 現象（Root Embedded Clauses）の統語メカニズムの解明に向けて研究を行った。REC 現象に見られる要素の多くが日本語では同軽名詞であり補文構造を持つことが明らかになり、また日本語と比較すると機能範疇としての軽名詞がさほど発達していない Dagaare 語では日本語タイプの REC 現象が存在しないことも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

This project investigated the syntax of Root Embedded Clauses (RECs) and revealed what structures they have. In many cases of Japanese RECs, so called light nouns are used and the RECs have a complement structure analogous to relative clauses. In contrast, Dagaare, which has not developed a light noun system while it has a full-fledged noun class system, lacks the type of RECs observed in Japanese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：生成文法 統語論 関係節 疑問文 軽名詞 埋め込み文

1. 研究開始当初の背景

1970 年の Joseph Emonds による MIT 博士論文以来、人間言語には所謂主節 (matrix clause)・根節 (root clause) と従属節 (subordinate clause)・埋め込み節 (embedded

clause) は様々な統語的（及び意味的）差異を示すことが明らかになった。そのうちの一つの大きな違いが後者の節では補文標識と呼ばれる要素が生起するのに対して、前者の節では生起しないという事実である。また適用される変形操作も両者間で同一ではない

ことも明らかにされた。Emonds (1974)は主節・根節のみで許される統語変形操作を根変形(root transformation)と呼んだ。しかしその後の研究で、いくつかの言語では、主節・根節のみで許されると考えられていた統語変形操作が限られた条件下で従属節内でも許されることが発見され(Hopper and Thompson 1973, Green 1976 等参照)、Heycock (2001)はこのような現象を概観し「Embedded Root 現象」(埋め込み主節現象)と呼んでいる。

しかしながら、人間言語の現象を詳細に見てみると、今までにほとんど注目されて来なかったもう一つの現象があることに気付く。すなわち、埋め込み主節現象とは逆に、主節・根節が従属節・埋め込み節の統語的特徴を伴って生起する現象である。このような現象においては、主節の文が補文標識を伴っていたり、また当然主節で起こり得べき統語変形操作が阻止されることがある (e. g. That Mary should go to the party?! ; 明日八時に学校にいくこと)。その結果、主節であるにもかかわらず見た目上、従属節と同じように見える。またこれらの構文は決して主節部分が省略削除されただけのものではないことは様々なテストを使って証明できる (cf. Evans 2007)。本研究課題はこれらの現象を「Root Embedded Clause (REC) 現象」(従属節がそのまま主節として生起する現象)と呼ぶこととし、その記述とメカニズムの解明を目指すことを目的とする。

管見では、この現象に唯一真っ向から取り組んだ研究はEvans (2007)のみと言っても過言ではない。しかしながら Evans (2007)は英語の主文が *that* や *for* といった補文標識で始まる現象を論じているものの、現象の全体的に存在を論じるとどまり、一般化や理論的・組織的な考察に欠けていると言わざるを得ない。従って REC 現象は生成文法理論に基づく言語研究において全く手つかずの問題である。

2. 研究の目的

REC 現象は先に述べたようにそれぞれの構文自体がほとんど記述的に研究されていない場合が多く、大半の構文は今日に至る言語研

究でほとんど注目すら浴びなかったものである。もしくは仮に注目されたとしても周縁的 (peripheral) 現象として扱われ、理論的な研究で中核的な研究対象となることは皆無だった。しかしながら、世界の言語を詳細に調べると REC 現象は周縁的として片付けるにはほど遠いほどの一般性を持っている。これはとりもなおさず REC 現象が人間の言語能力のメカニズムにより保証されていることを示しており、その理論的解明は非常に重要であることを意味している。さらにそれらの構文を REC 現象という統一的観点から、また主節と従属節の統語メカニズムという観点から考察したものは未だに存在しない。従って、本研究課題では REC 現象の詳細な記述的、及び生成文法理論に基づく統語研究を目的とし、REC 現象の背後に存在するメカニズムを明らかにする。理論的な問いは大きく分けて以下の四つに分類される。

(1) なぜ従属節は通常、補文標識と呼ばれる要素を伴って現れ、主節・根節はそのような要素を伴わない場合が非常に多いのか？ なぜ根変形が存在するのか？

(2) しかし一方で REC 現象に見られるように、なぜ一部の主節・根節は補文標識を伴って現れたり、統語的に従属節・埋め込み節のように振る舞うのか？

(3) REC 現象はなぜ言語一般から見ても限定的なのか？ また限定的であれなぜ可能なのか？ その背後に存在する言語に共通するメカニズムは何か？

(4) REC 現象にはどのような統語的・意味的共通性が見られるのか？ (または見られないのか？)

本研究は REC 現象を中心に研究するが、一方で、REC 現象のメカニズムを解明することは即ち Emonds (1970) が約 40 年前に観察して以来、記述的には妥当であるが理論的には未だに謎が多い「主節・非主節を統語的に区別するメカニズム」の精緻化と解明にも直接的に繋がってくるものである。また、REC 現象は限定的ではあるが世界の様々な言語で存在する。本研究課題では日本語と英語の研究を通して REC 現象に光を当てるが、一方で、

研究代表者が現在に至るまで研究を続けてきた琉球語（首里方言）と Dagaare 語（西アフリカガーナで話されている言語）のフィールドワーク調査により両言語における REC 現象も詳細に研究する。

3. 研究の方法

本研究課題は、理論的研究はもとより、事実上記述的研究すらほとんど存在しない Root Embedded Clause (REC) 現象を詳細に探究し、その統語メカニズムを解明することを目指す。従って、扱う主要言語は研究代表者の母語である日本語、及び英語である。しかしながら、人間の言語能力の普遍的性質とその多様性の解明を目指す生成文法理論の観点から見ると、人間言語の中でどのような REC 現象が存在し、それぞれがどのように各言語に分布しているかも極めて重要な問題である。このことから本研究課題では以下に挙げるフィールドワーク研究も重要な柱となる。

このような背景事情から、まず基礎的研究を積み上げた上で理論的研究を行うことが必要となる。従って、研究計画は3年間という比較的長い期間を設定した。

1年目は基礎研究期間と位置づけ、上述四言語それぞれにおける REC 現象の記述的研究に重点を置いた（REC 現象に該当する個別の現象は以下に述べる）。2年目は1年目で得られたデータを基にさらに基礎的研究を充実させデータの拡充をはかる一方で、データを理論的観点から考察した。最終年の3年目は前2年間で得られた成果をより広い理論的・類型論的コンテキストの中で捉え、人間の言語能力における REC 現象の位置づけとそのメカニズムの基盤を明らかにした。

研究期間中に主に扱った日本語、英語、琉球語、Dagaare 語の4つ言語における研究対象は以下の通りである。

(1) 日本語：日本語には古くには係り結び構文が存在したことはよく知られるが、本研究課題の観点からすればまさにこの現象は主文が形態的・統語的には従属節の形をもって現れる現象である。また現代日本語では所謂ノダ文、命令文、感嘆文が従属節の形態的・統語的特徴を有した主文として現れるが、

なぜそのようなことが可能であるのかという問いは今までには全く明らかになっていない。

(2) 英語：英語には Evans (2007) が観察しているような主文が that や for といった補文標識で始まる構文が存在する。また、所謂感嘆文は Wh 要素が文頭に生じるが疑問文と異なり主語・助動詞倒置が生じないという意味で従属節の性質を示す。また Zanuttini and Portner (2003) が論じている所謂名詞感嘆文 (Nominal Exclamatives) と呼ばれる現象が存在し、表層上関係節を伴った名詞句が主文の文として生じる。

(3) 琉球語：琉球諸語には古代日本語に存在した「係り結び」構文が今尚存在する。この構文は古代日本語と同様に従属節要素が主文として現れる現象であり、現代日本語ではもはや研究不可能な現象が今でも話者の直観を通じて考察可能であるという点で極めて重要である。また係り結びの存在と関連して、現代日本語に見られるようなノダ文が存在しないという興味深い特徴があり、日本語と比較研究することにより REC 現象の通時的な発生・変化・衰退などを明らかにすることができる。

(4) Dagaare 語：Dagaare 語にはある種の感嘆文等において主節が従属節の声調 (tone) を持って発話される現象が存在する。また従属節全体が決定辞を伴って主文として使用される構文や、表層上は関係節を伴った名詞句が独立文の意味解釈と統語特徴をもつ現象があることが私の今までのフィールドワークで観察されているが、これらは全く研究されていない領域である。

4. 研究成果

3年間の研究の結果、以下の点が明らかになった。

(1) 日本語の名詞句構造において軽名詞 (light noun) が存在することが明らかになった。さらに日本語と琉球語の NP 内削除現象の研究から軽名詞は独自の主要部 (n) を形

成していることが判明した。[発表論文(2)(3)(4)(5)を参照]

(2) REC 現象に生起する文末要素の多くは、上記(1)で明らかになった軽名詞が用いられており、統語構造上は関係節に類する構造を持っていることが分かった。従って形名詞構造が REC 現象の発達に関係していることが予測される。[関連するものとして発表論文(7)を参照]

(3) Dagaare 語のフィールドワークから、Dagaare 語には関係節タイプの REC 現象が観察されないが、同様に軽名詞の syntax が日本語とは異なる(いわゆる名詞クラスを持つ言語である)ことが明らかになった。[発表論文(1)を参照]

(4) 琉球語(首里方言)には日本語と異なりノダ文(RECの一種)が存在しない。これは琉球語(首里方言)が係り結びのメカニズムを保持していることと関係していることが分かった。また日本語との対照研究から係り結びの有無が名詞内削除現象の有無にも影響していることも実証された。[発表論文(2)(6)を参照]

(5) 本研究課題の研究から派生した研究成果として、日本語と琉球語(首里方言)の削除現象の比較対照研究から両言語が異なる削除メカニズム(削除と代名詞化)を持つことが明らかになった。特に日本語に関しては従来削除分析が優勢であったがこれを覆す結果となった。[この研究成果の一部は発表論文(2)に掲載]

(6) また、上記(5)の研究成果に付随して、削除現象に関わる日本語の同音反復現象の研究から、同音反復現象を司るメカニズムは統語構造に基づく位相単位に対して働く PF 制約であることが明らかになった。

以上の成果は今日までの研究では明らかになっていなかったものであり、国内外の生成文法理論研究に貢献するものと考えられる。ただし、REC 現象の全容解明にはまだほど遠く、今後の研究課題として残るものもある。特に、日本語やそれ以外の言語におけるそれぞれの REC 現象の構造の詳細な記述はまだ不

十分であり、そこから今後得られるデータは生成文法理論が目指す原理とパラメータの解明に向けて非常に重要であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

(1) Hiraiwa, Ken. (出版確定)
Internally-Headed Relative Clauses. In *The Companion to Syntax* (2nd Edition), eds. Martin Everaert, Henk Van Riemsdijk, Rob Goedemans, Bart Hollebrandse. Wiley-Blackwell.

(2) Hiraiwa, Ken. (出版確定)
Constraining Doubling. In *Identity* (a working title), ed. Kuniya Nasukawa and Henk Van Riemsdijk. Mouton de Gruyter.

(3) Hiraiwa, Ken. 2013. Decomposition of Indefinite Pronouns. *The Proceedings of the Workshop on Syntax and Semantics at Fuji Woman's University*, ed. by Hiroko Yamakido. Sapporo. 53-68.

(4) Hiraiwa, Ken. 2012. The Mechanism of Inverted Relativization: A Silent Linker and Inversion in Japanese. *Journal of Linguistics*. 345-388. Cambridge University Press. [DOI: 10.1017/S0022226712000126]

(5) Hiraiwa, Ken. 2012. Kuroda's "Left-headedness" and Linkers. *The Proceedings of Japanese/Korean Linguistics 20*. CSLI/The University of Chicago Press. 321-336.

(6) Hiraiwa, Ken. (with Shinichiro Ishihara) 2011. Syntactic Metamorphosis. *Syntax: A Journal of Theoretical, Experimental, and Interdisciplinary Research*. 15(2):142-180.

Wiley-Blackwell.

[DOI: 10.1111/j.1467-9612.2011.00164.x]

(7) Hiraiwa, Ken. 2010. Complement Types and the CP/DP Parallelism: A Case of Japanese (a commentary on Haegeman and Ürögdi (2010)). *Theoretical Linguistics*. 36(2): 189-198. Mouton de Gruyter.

[DOI: 10.1515/THLI.2010.013]

(8) Hiraiwa, Ken. 2010. Spelling Out the Double-o Constraint. *Natural Language & Linguistic Theory*. 28(3):723-770.

Springer.

[DOI: 10.1007/s11049-010-9098-9]

[学会発表] (計 3 件)

(1) Hiraiwa, Ken. 2012. Modification and Decomposition of Indefinite Pronouns. Workshop on Syntax and Semantics. Fuji Woman's Univeristy, Sapporo. (September 8, 2012)

(2) Hiraiwa, Ken. 2012. Universals and Parameters in Head-Internal Relativization. Workshop on Internally-Headed Relative Clauses. ZAS/Humboldt University, Berlin. (October 25-27, 2012)

(3) Hiraiwa, Ken. 2010. Kuroda's "Left-headedness" Revisited. *Japanese/Korean Linguistics* 20. Oxford University, UK. (October 1-3, 2010)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平岩 健 (HIRAIWA, KEN)

明治学院大学・文学部英文学科・准教授

研究者番号: 10572737